

民俗学 = 暦 ~ ハレとケ ~ 祭り =

2008年8月23日

【常盤塾参考資料】丸山明久

1. はじめに

民俗学をかじり始めて最初に触れるのが、柳田國男により唱えられた「ハレとケ」という、時間論をとまなう日本人の伝統的な世界観である。

その日本人の世界観の根底には、稲作を基礎とする農耕民族としての「暦」があり、太陽と月という二つの天体が太古の時間を基本的に規定していた。そこには、太陽、月ともに周期としての最盛期と最弱期（太陽ならば夏至と冬至、月ならば満月と新月）があり、世界は死と再生をくり返すものと捉えられていた。

このように太古の暦は、月の「死と再生～満月～死と再生」というひと月のリズムと、太陽の「死と再生～最盛期～死と再生」という一年のリズムとから成り立っていた。そして、簡単に言ってしまうと、その暦の節目が、「ケ」⇔「ハレ」の節目であり、「ハレ」の切り替えに「祭り」が行われたということになる。

以下、「暦」、「ハレとケ」、「祭り」の順に詳述することにする。

2. 暦

暦（こよみ、れき）とは、『時間の流れを年・月・週・日といった単位に当てはめて数えるように体系付けたもの(Wikipedia)』。

現代において暦と言えば「カレンダー」であるが、今日や約束の月日、日付と曜日の対照、それに祝日確かめる暦表にすぎない。これに対して暦とは、自然の運行を古代合理的に、また呪術的に読み解いたものである。なお「こよみ」の語源は、「日読み」（かよみ）であるとされており、一日・二日・・・と正しく数えることを意味する。

律令制下では中務（なかつかさ）省に陰陽（おんみょう）寮が設けられ、そこには天文・暦・陰陽博士、陰陽師（おんみょうじ）なる職があった。天文を中心に自然リズムの変異の徴候（日月食がその代表的なもの）を嗅ぎ取って、その意味（天意や何かの予兆）を解釈し、密奏を行った。これに拠って、天皇は元号を改めたり、神仏への祈祷を命じたりした。そんな彼らの日常業務の一つが暦作りであった。

長らく朝廷のものであったこの暦作りを奪ったのが、朝廷の権限をことごとく奪取した最強の武家政権・徳川幕府である。改元や暦を作るということは、象徴的には「世界」を創ることに等しく、治世者の権威ある政事だった。暦作りとその管理は、1684年（生類憐れみの令の綱吉の治世）に設けられた「天文方」という幕府の機関の手に移り、この年、平安時代から823年にわたり使われてきた宣明暦（せんみょうれき）から、貞享暦（じょうきょうれき）という近代的なものに改暦された。

今日、旧暦といわれる暦は太陰太陽暦をさす。太陰太陽暦は、月の運行（太陰暦）と太陽の運行（太陽暦）を組み合わせてつくられた暦法で、月の周期と太陽の周期の調整にさまざまな工夫が重ねられてきた。春夏秋冬という四季の一巡を知るには太陽の運行に基づくしかないが、日々の移り変わりを知るには月の変化を見る方が便利である。

月は、新月・上弦・満月（望：ぼう）・下弦・晦日（かい・みそか）という変化を見せて一巡する（ちなみに、太陽、月、地球がこの順に一直線になる状態を朔（さく）と言い、これから月が新しくよみがえってくるという意味を含めて「新月」と呼び、「朔日（ついたち）」は月立ち（ついたち）の音便である。また、月末は「月隠り（つきごもり）」がつかまって「つごもり」といったが、月がこもって晦（く）い（くらい）ので「晦日」（つごもり）となり、さらに月末を三十日（みそか）と言い慣わしていたため、「晦日」を「みそか」と読むようになった）。月の周期は、平均 29.53 日（29 日 12 時間 43 分）で、12 ヶ月は 354 日と約 3 分の 1 日となる。これは一太陽年（365.2422 日）と比べると約 11 日短い。そこで、太陽の運行とのくい違いが 1 ヶ月になったところで、閏月がある閏年（13 ヶ月）を設定して調整を図ることとした。

但し、平年は 354 日か 355 日、閏年は 382 日か 383 日となり、月日からは季節がわからなくなってしまいう問題が残るため、太陽の位置（黄経）から別基準を設けることにしたのが二十四節気（にじゅうしせつき）である。冬至と夏至で 2 等分し（二至）、それを春分と秋分で 2 等分し 4 等分となり（二至二分）、そのちょうど真ん中に四立（しりゅう）つまり立春・立夏・立秋・立冬を定め、8 等分した（八節）。さらに 3 等分（15 日ずつに分割）すると 24 節気となる。

以下、月は節月、括弧内は太陽黄経と太陽暦での大体の日付である。日付は年によって変動する。

- 【春】一月：立春(315 度、2 月 4 日)、雨水(330 度、2 月 19 日)／二月：啓蟄(345 度、3 月 6 日)、春分(0 度、3 月 21 日)／三月：清明(15 度、4 月 5 日)、穀雨(30 度、4 月 20 日)
- 【夏】四月：立夏(45 度、5 月 5 日)、小満(60 度、5 月 21 日)／五月：芒種(75 度、6 月 6 日)、夏至(90 度、6 月 21 日)／六月：小暑(105 度、7 月 7 日)、大暑(120 度、7 月 23 日)
- 【秋】七月：立秋(135 度、8 月 7 日)、処暑(150 度、8 月 23 日)／八月：白露(165 度、9 月 8 日)、秋分(180 度、9 月 23 日)／九月：寒露(195 度、10 月 8 日)、霜降(210 度、10 月 23 日)
- 【冬】十月：立冬(225 度、11 月 7 日)、小雪(240 度、11 月 22 日)／十一月：大雪(255 度、12 月 7 日)、冬至(270 度、12 月 22 日)／十二月：小寒(285 度、1 月 5 日)、大寒(300 度、1 月 20 日)

ちなみに、西洋に二十四節気はないが、冬至・夏至・春分・秋分、それに立春など四立の概念は共通である。太陽が最も衰える冬至の、次の季節の節目、これは太陽の復活を意味するが、これを 1 年の初めとした。すなわち、立春こそが正月＝一月の意味である。太陽暦の正月では冬であるにもかかわらず、年賀状に「初春のお喜びを申し上げます」と書くのは、旧暦の正月（立春を含む月）のなごりである。

また、2 月 3 日は節分であるが、節分とはそもそも四立の前日のことを言う。現在では特に立春の前日を指す言葉となっているが、それは四立の中でも最も重要な立春＝“一年（太陽サイクル）の始まりである「正月」”の直前が「節分」として特別視されている結果と言える。

こうした日本の旧暦の太陰太陽歴は、中国に起源を持つ中国暦とも呼ばれており、最大の特色は、縦横にはりめぐらされた陰陽五行説の迷路である。陰陽五行説とは、陰と陽の二元素の働きによって万物は生成発展するという陰陽説と、万物は木・火・土・金・水の五気からなり、その五気の相生相克の働きによって森羅万象が形成されていくとする五行説とが合体してできたものである。更に深く暦に関わると切りがないので、民俗学の本題の「ハレとケ」の話題に移ることにする。

3. ハレとケ

「ハレ」と「ケ」は共に、日本を代表する民俗学者・柳田國男（明治8年～昭和37年）によって唱えられた、日本人の生活リズムを表現した言葉で、漢字で書く場合ハレには「晴」、ケには「褻」の字が当てられる。柳田は、かつての日本人の生活にはハレとケの二つの時期があり、両者ははっきりと区別されていた、と主張した。「ハレ」とは、神社の祭礼や寺院の法会、正月・節句・お盆といった年中行事、初宮参り・七五三・冠婚葬祭といった人生儀礼など、非日常的な行事が行われる時間や空間を指す。一方、ハレ以外の日常生活（普段の労働や休息の時間・空間）が「ケ」であるとして、両者の違いを明確にし、このハレとケとの循環リズムから日本の生活文化が分析できると唱えた。

非日常であるハレの日は、単調になりがちな生活に変化とケジメをつける日でもあり、この日には人々の衣食住に大きな変化が表れ、例えば特別な日にのみ着用される「晴れ着」を着たり、家や部屋には普段とは違う装飾を施したり、酒・米・魚・餅・団子・赤飯・肉・寿司といった普段の生活では口にしない食物が供せられるなどし、非日常的世界が設定された。中でも、ハレの場における酒は、味を楽しむためというよりも、酔う事によって異常心理を経験し、共同体を構成する人々が集団で共に酔って連帯感を深める事が目的であったと柳田は述べている。また、今でも使われる「晴れ着」「晴れ姿」「晴れ舞台」などの言葉は、いずれもハレの概念に基づくものである。

一方、ケの時空とは普段の生活そのものを指し、朝起きて食事をして昼間は働いて夜になったら休眠する、という日常の状態の事であり、ケは、普段着を意味する「褻着」（けぎ）や日常食を意味する「褻稻」（けしね）などの民俗語彙から抽出された概念と言われている。

柳田は、このハレとケの循環の中に稲作を基礎とする民族生活があった事を指摘しながら、近代化と共にその両者の区別が曖昧になってきていることを指摘した。事実、江戸時代後半以降は普段でも酒が飲まれるようになり、魚食や肉食も日常化し、人々の服装も色鮮やかになるなど、ハレの日常化は着実に進んでいった。

このように、柳田は主にハレを中心として民俗生活を捉え、ケは単にハレに対立するもの、ハレ以外の日常生活と位置付け、ハレとケという二つの生活リズムによって民俗生活のリズムを強調した。その後、この二つに加えて新たに「ケガレ」という三つ目の概念が、昭和45年以降に唱えられるようになった。

文化人類学者の波平氏は、古くから語られてきた「穢れ」（けがれ）という不浄を意味する語を「ケガレ」とカタカナで表記して民俗学の分析概念として用いる考え方を提示した。ハレは清浄性・神聖性、ケは日常性・世俗性、そしてケガレは不浄性をそれぞれ示す概念であり、日本の民間信仰のバリエーションは、このハレ・ケ・ケガレの相互の関係の差異によって生じるものであるとした。

それに対し、柳田門下の民俗学者・桜井徳太郎氏は、ハレとケの媒介項としてケガレを設定し、ケガレは稲の霊力であるケが枯れた状態、つまり「ケ枯れ＝ケガレ」であり、そのケガレを回復するのがハレの神祭りであると唱えた。つまり、波平氏が「ハレ⇄ケ⇄ケガレ⇄ハレ」と相互間が対立概念であると主張したのに対し、桜井氏は「ハレ⇒ケ⇒ケガレ⇒ハレ」という循環論を唱えている。

ちなみに、神道でいう死の「穢れ」とは、死に至る病気や事故、その苦しみや、遺された人達が悲しみ嘆く状態の事を、気が枯れた状態＝気枯れ＝ケガレと解釈している。但し、死そのものが穢れであるとか、死んだら穢れた存在になるとか、そういった意味では決してない、ということである。

桜井氏がケガレを含めた循環論を唱えるように、ハレとケの概念は、円環的時間論に基づいていると言える。円環的時間論というのは、世界は始まるが、一定期間が経ったら崩壊し再生するという、時間が同心円を螺旋状のように回る世界観である。これに対するのが直線的时间論である。世界は一度始まった元には戻らず、絶えず変化して最後は崩壊を迎えて終わるとい、一回限りの一本の時間軸が延びた世界観であり、ユダヤ・キリスト教の世界観(神による世界創造～終末と審判)に基づくものである。

キリスト教的ヨーロッパ文明が全世界を席卷するまでは、世界では円環的時間論がむしろ圧倒的であった。人間は自然の一部であり、自然とともに生きており、世界にあるあらゆる生き物は生と死によって明滅し、子は親を真似るように生きてきた。実際、直線的时间論を自明にして生きる現代人である私たちがさえ、いまでも基底的には円環的時間論を生きている。

円環的時間論では、例えば、正月是一年という「時間」の始まりであるとともに、「世界」の誕生(再生)と考えられる。生の前には死がある。一年自体が生と死をくり返しているという感覚は、ハレとケに通じている。暦の章で示したように、一日や一月も生と死をくり返しており、太陽や月は生き死にし、円環的時間をくり返している。同様に、人間も一生涯の中で絶えず生き死にしている。放っておくと、生は崩壊してしまう。生エネルギーを補充し、再生行為をくり返さねばならない。これが円環的時間論に棲む人生観である。

ではいかにして日本人は、生涯の中で生エネルギーを補充してきたのであろうか。それは祭りの日に神から得てきたのである。祭りの日こそ晴れ(ハレ)の日である。いまでは祭りとは見せ物となったものを言うが、本来は、正月や盆、節句、農耕儀礼など、神と交渉をもつ様々な機会すべてが祭りである。すなわち、これがハレの日である。

4. 祭り

「まつり」という言葉は「献る・奉る(たてまつる)、奉る・祀る(まつる)」の名詞形で、本来は神を「まつる」こと、またはその儀式を指すものである。柳田國男は「服ろう(まつろう)」と同義語で、尊い方のおそばについて仕えると言う意味だと説いている。「まつる」という言葉の古い意味は「供える」「さし上げる」と言った意味で、つまり祭りとは「祝詞(のりと)、詔詞(みことのり)を唱誦して、神霊を招き饗宴をもって歓待し、慰撫(いぶ)して神威を高め、それに属する儀礼」を言う。

また、『祭祀』の語は、古くは養老令にも見られるが、「祭」という漢字は夕(肉の意)と又(右手の意)と示(神前に置く机の形を示し、神の意)から成り立っていて、右手の肉を持って神に捧げる意味であり、「祀」は示(神)に巳(シという音符)を付けた字で、祭・祀のいずれも支那で神を祭る事を称するものであり、わが国の「まつり」にもこの語をあて用いた。

日本人の古い考え方では、神は祭りの機会ごとに来臨され、祭りが終わると帰っていかれると考えられていた。だから、神はいつも社に鎮座していると考えようになった現在でも、祭りの基本的儀礼構成は、まず神を迎え、神酒(みき)・御食(みけ)を供えて仕えまつり、願いや感謝の祈りを捧げ、時が来ればお送りすると言う形をとっている。そして神祭が終わると、神に供えたもの、あるいは神に供えたと同じものを人々は飲食する。それを直会(なおらい)という。神の召しあがりものを神とともに食べる、つまり神と共食することである。神に供えた神酒や供え物を一同に分配し、それを飲食することによって

神の偉大な霊力を人々は自分の身に得ることが出来ると考えたのである。祭りはそれを行う季節があり、季節と可分の関係にある。

これはわが国の祭りの特徴の一つである。別な言い方をすれば、祭りが一年の季節を定める根拠になっていたと言ってよいほどである。ハル・ナツ・アキ・フユという言葉の名称は、祭りの期間を言う語から出たものとも言われている。日本の古くからの大切な生業は稲作農業である。わが国の一年はこの稲作を中心とする暦年であり、祭りもこれと深く関わっていた。

春耕秋収の稲作は、春にその農穫を神に祈り、秋に収穫の結果を神に報告し感謝する。これが春祭りと秋祭りである。

収穫感謝の祭りに新穀を神に供え、また神に差し上げたものを人間も共食する。神と人間ともに、飽き食いし（お腹いっぱい食べ）、農穫をもたらしてくれた神に感謝し、また来年もこうなることを祈る。秋（アキ）は「飽き食い（アキグイ）の祭り」に由来するという。例えば、10月17日の伊勢神宮神嘗祭（かんなめさい）は、その年の初穂を天照大神はじめ御関係の神々に捧げ、夜を徹して行われる年間最大の祭りであり、それらすべての秋祭りの締め括りとして行われる重儀が11月23日の新嘗祭（にいなめさい）である。

冬は生産活動の間に消耗したエネルギーを増殖する期間である。新嘗祭によって新しく甦った霊魂が翌春に備えて増殖し、力を蓄えつつある季節であり、霊魂（みたま）が増殖する（ふえる＝フユ）ことから冬（フユ）につながったと言われる。

春とは、自然万物の生命が張る（ハル）という意味があり、霊魂の力が外へ向かってハル季節である。威力ある霊力を身につけて完全な体になって出てきた状態がハレの状態である。春になると山の神＝祖先の神も里に下りて来て田の神となり、秋の実りをもたらした後、再び山に帰っていくというのが古い信仰である。そのため、神迎えの行事が各地で行われる。新しい強力な霊魂を身につけ復活した春を迎えて今年の農穫を神に祈る。これが春祭りである。秋・冬・春と続く季節は神祭りの期間である。

他方、夏祭りはこの三つの季節の祭りとは性格が異なっている。晩春から夏にかけては稲の成育にとって一番大事な期間であるが、稲の成育を脅かす病虫害が発生する時期でもある。また人間にとっても疫病の流行しやすい不安な季節である。そこでそうした諸々の災いを祓いやることで厳しい夏の盛りを乗り越えようとして始まった神事が水無月（六月）の大祓である。これが六月から七月に集中して行われる祇園祭りや夏越祭（なごしさい）に代表される夏祭りに発展した。夏（ナツ）は、災いをものに撫で付けて祓い流す、「撫づ（ナツ）」と関連のある言葉である。夏祭りには、神輿が川や海に入ったり、また見越しに水をかけたりする行事が多く見られるのも、こうした祓えの信仰によるものである。

祭りの本質とは何か。神話の再演、世界の始まりの時間を神といっしょに過ごすことにある。そうして原初のエネルギーを得るのである。その具体的な象徴行為が餅（米）を食べることだ。これはただの米ではない。神に捧げる食べ物を御饌・御食（みけ）というが、これをお裾分けしたケ（食べ物）である。神のエネルギー源と同じものを食べることで、ケ（生エネルギー）が充満するのである。これがハレル（晴れる、張れる、春、満ち満ちる）という意味である。なお、神酒・御酒（みき）の場合も同様であるが、この「水」は変若水（おちみず、若返り・再生の水）となる。

それぞれの神社では、毎年さまざまな祭祀や行事を執り行っている。現行のものは、神社本庁の「神社祭祀規定」によるものが便利であり、そこには神社の祭祀を、大祭、中祭、小祭に区分してあるので、以下に参考に記しておく。

【大祭】例祭、祈年祭・新嘗祭(にいなめさい)、式年祭、鎮座祭、遷座祭・合祀祭・分祀祭である。また、その神社および祭神に由緒のある祭祀で大祭に準ずるものも含まれる。

【中祭】歳旦祭(さいたんさい)・元始祭、紀元祭・神嘗祭(かんなめさい)・当日祭・明治祭・天長祭と、これらに準ずる祭祀・また各神社及び祭神に関係があつて、中祭に準ずる祭祀のことである。

【小祭】大祭および中祭以外の祭祀のことである。

各神社で最も重要な祭祀は例祭である。これ尊称して例大祭、大祭り、御祭り(おんまつり)などとも言っている。例大祭は、その神社で行われる年に1度のお祭りである。そのことは、祝詞にも「1年に1度の御祭」と記されている。また例祭は、その神社が創建されたことを祝福する祭りであるため、例祭の祭日は各神社によって異なっている。

5. まとめ

毎日の生活の中で何気なく行っている様々な行為や目にする現象も、全く理由なく行われたものではなく、それなりの意味と歴史が存在している。そして、日常生活の平穏や家族の健康を祈り、農作物の豊作や商売繁盛を願う心は昔も今も変わることはない。人間の力でかなえることができない、これらの願いを人々は神仏に託した。神仏への祈願は、「ハレの日」として、その時々に行われたり、毎年決まった日に行われたりした。それは、「暦」として記録に残され、「祭り」として伝えられている。

大自然に抱かれた人の営みの中で、我々の祖先が編み出した偉大な叡知が日常生活の所作の中に籠められていることを忘れてはならないと思う。

【参考文献】

手にとるように民俗学がわかる本：岸祐二著（かんき出版）

民俗学がわかる：AERA Mook（朝日新聞社）

暦のからくり～過去から学ぶ人生の道しるべ：岡田芳朗著（はまの出版）

年中行事を科学する：永田久著（日本経済新聞社）

mansonge のニッポン民俗学 分類目次

<http://www.eonet.ne.jp/~mansonge/mjf/index-b.html>

国立国会図書館「日本の暦」

<http://www.ndl.go.jp/koyomi/index2.html>

絵画で見る日本の祭り～廣田憲治のアートギャラリー

<http://www.artkenji.com/index.htm>

晴天時報 暦の話

<http://www.asahi-net.or.jp/~nm9m-hsy/koyomi/>

赤間神宮

<http://www.tiki.ne.jp/~akama-jingu/>